

弥生土器における色調研究への模索

長友朋子・秋山浩三

1. “赤い器台”と“白い器台”、そして“黒い器台”一序にかえて―

(1) 池上曾根遺跡での経験から

本節での検討内容は、弥生土器の色調のちがいが当時の社会において一定の意味があった、しかも、その色調差異は胎土調整の段階から意図されていたものではないか、というものである。

弥生土器にかぎらず遺跡調査に従事していて、出土土器類のなかで他の多くの資料に比べ、妙に印象に残る色合いを見せる個体にでくわす経験がしばしばある。それらは従来なら一般的に、他地域からの搬入品だろうと推定することが多い。

筆者（秋山）のそのような体験の一例が、1995～1999年に発掘調査等にかかわった池上曾根遺跡（大阪府和泉市・泉大津市）の弥生土器を扱っていた時にあった（図428）。出土量が膨大な弥生時代中期後半の土器中に、他とちがって変に目に付く赤褐色系の資料があった。しかも、それはやや大形の器台にかざられており、当時は“赤い器台”と呼んで注意していた（図428-2～4）。“赤い”個体以外の器台は、淡灰白褐色～淡橙灰白色系の色調で、一瞥して色合い的にいうなれば“白い器台”である（同-1）。

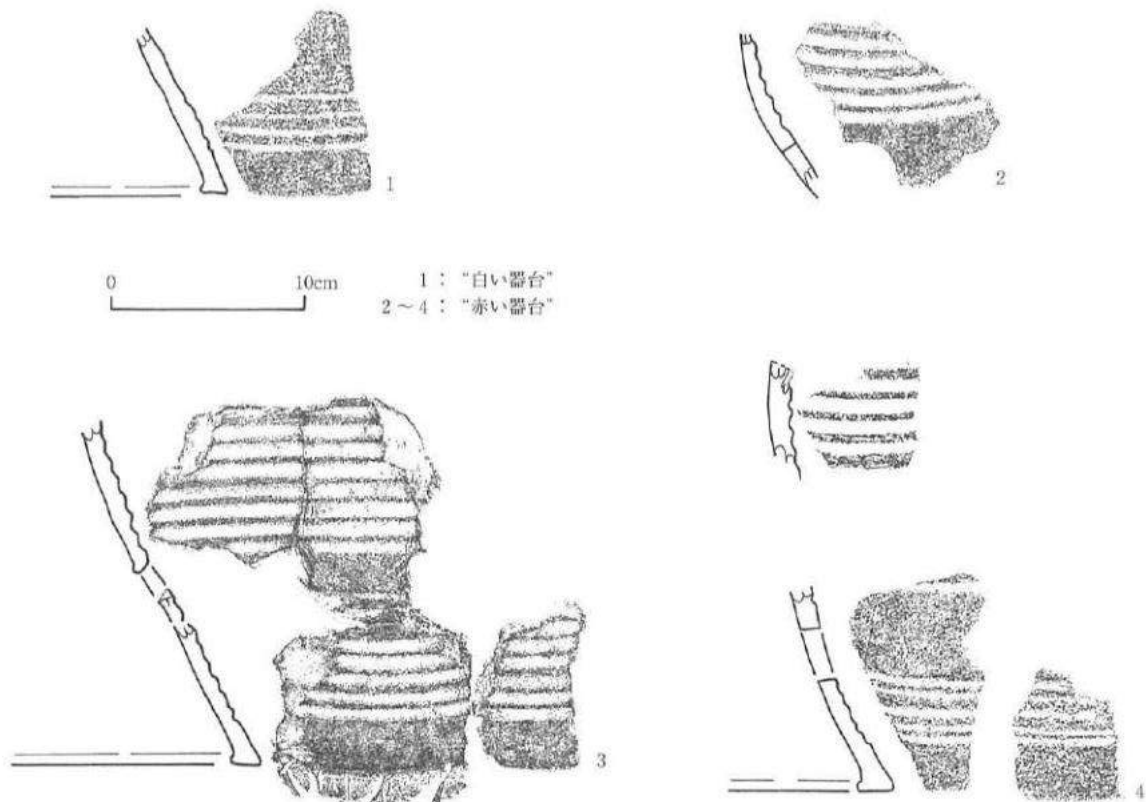


図428 池上曾根遺跡における“白い器台”と“赤い器台”

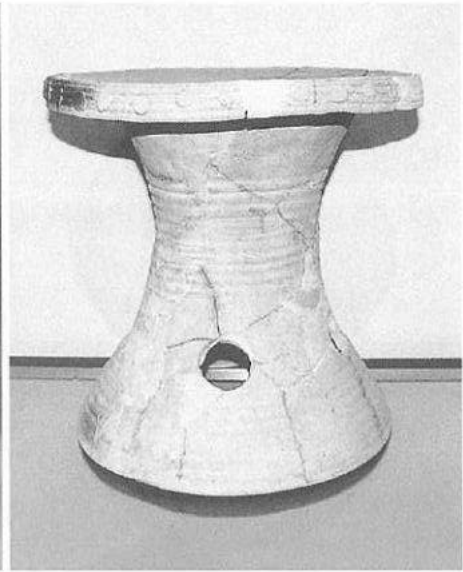
中期弥生土器のなかで器台という器種は、出土量は壺や甕に比べさほど多くないが、池上曾根遺跡では、単純化すると“赤”と“白”の2種色調の器台があったことになる。このうち“白い器台”は、本遺跡出土の他器種にみられる土器色調と大きくはかけ離れないので、そのほとんどが在産品で、“赤い器台”は他地域産の搬入品だろうと単純に推定していた。そして、器台の外面に施された凹線文が、“白い”個体では幅狭く、“赤い”個体では幅広い傾向にあるようなので、色調のちがいが施文様相にも相関性をもち、ひいては製作地の別を反映している可能性を想定した（秋山2004）。

（2）近畿各地の土器観察で思ったこと

その後、何回か近畿各地の弥生土器を観察する機会があった。すると、池上曾根遺跡で注意した“赤い器台”に類似した資料が、各地の中期後半土器群のなかに少ないながら存在するのが判明した。実見した遺跡数自体が多くないものの、確実な例として、和泉地域の四ツ池遺跡（大阪府堺市）、河内地域の雁屋遺跡（大阪府四條畷市、写真11-中・手前2点¹⁾）と長尾谷町遺跡（同枚方市）、東摂津地域の森小路遺跡（大阪市）で確認でき、少なくとも大阪府下一円の比較的広い範囲に分布する状況が把握できた。しかも、同様な色調をみせる製品は、他の大小の器種ではなく、この種のやや大形の器台にしかみられない可能性が高いと推測できた。また、この色調以外の器台では、池上曾根遺跡で確認したような“白っぽい”資料が多い傾向もみられた。したがって、“赤い器台”は府外の何処かに製作地があり、それが各地域に搬出されていると推定した。この種の器台は、当時の土器のなかにあって決して小形品ではなく、かなり重量がかさむ個体である。類似した現象には、弥生時代中・後期に、生駒山西麓産の太頭壺や有段口縁壺、広口壺等の貯蔵用器種の大形品が中河内地域から近畿各地に搬出されている事実がみられる。このように、特定地域で製作されたかぎられた器種の大形品が、やや特殊に各地へ流通していた実態が弥生時代にあったことになる。

なお、この“赤い器台”の製作地に関してであるが、2000年7月に開催された第10回「大阪の弥生遺跡検討会」において一定の見通しを得ることができた。先述した枚方市長尾谷町遺跡の“赤い器台”を観察しながら、上記のような筆者の雑感を森岡秀人氏にご説明したが、その時、この種の赤褐色系の弥生土器は西摂津地域にみられる資料で、しかも胎土中に六甲花崗岩の細粒が含まれている点から相違ないという指摘をいただいた。そうすると、全点とは断言できないものの“赤い器台”は、西摂津地域の土器のなかから大形器台が選ばれ、それらが大阪府下まで遠距離移動してきた蓋然性が高いことになる。

ところで、中河内地域の生駒山西麓産土器は、胎土中に角閃石粒を含有し暗褐色～茶褐色系の色調を呈することから、肉眼観察でも峻別が容易である。その土器の色合いは、俗に「チョコレート色」とも表現されるように、近畿地方の他の土器に比べると“暗い（黒い）”。この生駒山西麓産土器は、弥生中期土器の段階において、簾状文をはじめ櫛描き文様を繁用するが、凹線文様ではほとんど装飾されないという特徴を備える。したがって、土器外面に凹線文を多用する器台において、生駒山西麓産胎土で製作された個体は希有な存在になっている。このような貴重例となる生駒山西麓産胎土の大形器台が、雁屋遺跡の墓域に設けられた土坑中から、“赤い器台”2個体と一緒に3個体も出土している（図429-4～8、写真11-中・奥2点）。しかも、この生駒山西麓産器台は、いずれも大きさや文様構成が非常に酷似しており、同一人物の製作品になる可能性も指摘されている（四條畷市教委1994、大庭2002）。このように、同じ土坑中から完形に復原できる器台5個体が割られた状態で埋納されていた背景には、特殊な意味合いがありそうである。そのなかに、一般的に製作されていなかった生駒山西麓産の大形器台が含まれていた事実からは、特別な事情のもとで特注品としてそれらが製作された可能性が指摘できよう。



上：方形周溝墓の供献土器群における“白い器台”一加美遺跡（大阪市）
 中：墓域の土坑から一括出土した“赤い器台”（左手前2点）と“黒い器台”（奥2点）一雁屋遺跡（大阪府四條畷市）
 下：生駒山西麓産土器群における“黒い器台”一瓜生堂遺跡（大阪府東大阪市）

写真11 “白い器台”“赤い器台”“黒い器台”と共伴土器ほか

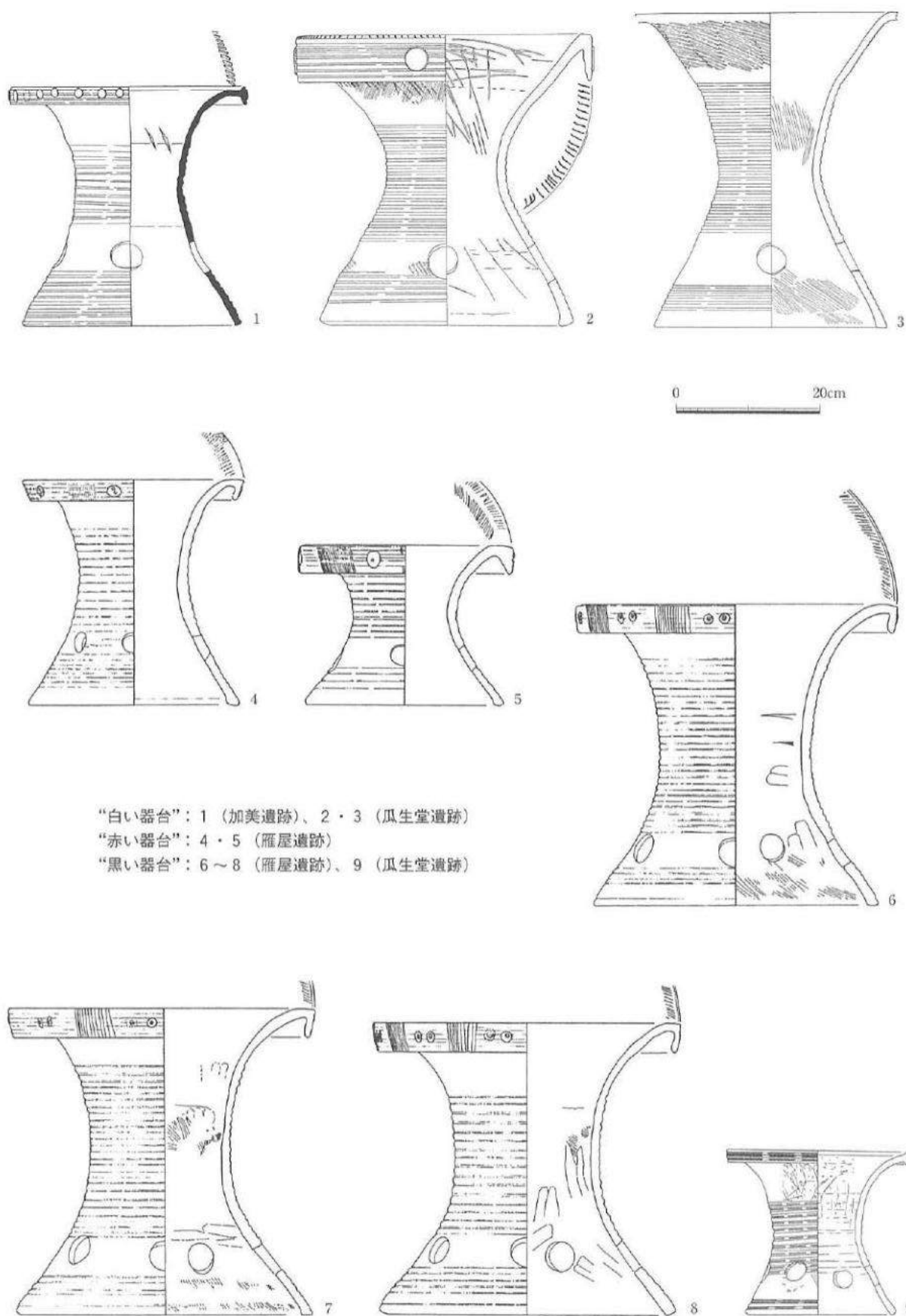


図429 近畿における“白・赤・黒の器台”の代表例

ともあれ、上記した“赤い器台”と“白い器台”のほかに、出土量は少ないものの、生駒山西麓産のいわば“黒い器台”が存在することになる。

（３）弥生土器の色の意味をめぐって

以上のことから、近畿地方の弥生時代中期後半には、単純かつ象徴的に表現すれば、“白・赤・黒”という３色の（大形）器台があった。うち、“赤”は西摂津産の可能性が高く、“黒”は中河内（生駒山西麓）産で、一方、“白”は個別特定はできないが総体として各在地産ともいべきものとなる。このように、土器の色調は、各地の素地胎土に含有されている成分の状況によって、焼き上がりの色合いに変化がおこり、それが製作地の個性や相違を反映している、と一般的には理解される傾向にある。

しかし、“赤”や“黒”の色調以外の器台には、詳細な比較検討をまったく実施していないが、“白い”色合いの個体が多いという傾向も一面では看取できる可能性が高い。今回のように“白・赤・黒”というように象徴化して表現できた背景には、製作地の差異だけにとどまらない何らかの要因や意図が存在した点を、考慮すべき余地があるかもしれないと考えられる。

このように、弥生土器の色調に関しては、製作地（素地粘土）の比定をめぐる問題をこえた、“土器色調の意味”にかかわる検討・研究への方向性も含有されていることになる。このあたりの可能性を考慮して、以下では、今回の瓜生堂遺跡出土の弥生中期土器を中心素材とし、弥生土器色調研究への模索的な作業・分析を実施してみたいと考える。器台をめぐる上記してきた内容は、肉眼観察によって得られた個人的な印象に依拠した成果である。そのため今回の検討実践にあたっては、計測器を用いることにより客観的な数値化をおこない比較考察してみることにした。

２．弥生土器の色調研究とその方法

九州北部において丹塗土器が中期に盛行し、「色によって装飾する」地域のあることが知られている。この九州北部の土器は「ベンガラを器面に塗る」ことによって赤い色調に仕上げられているが、近年その胎土自体も赤く発色するような素地作りのなされていることが明らかにされつつある（中園1998、鐘ヶ江1999）。

このような、仕上がりを考慮した土器の素地のコントロールは、例えば高杯に混和される鉍物の大きさが細かく、甕には粗いといった土器観察によってもしばしば経験していることである。近畿地方に目を向けると、「生駒西麓型土器」とよばれる土器群は角閃石を含み茶褐色を呈し、文様と形態だけでなく色調や胎土によって平野の土器と区別することができる。また、各地において、先述のような色調の異なる器台が認められる点は重要であろう。このように色調のちがう土器群が製作されたり、器種によっては数種の色調差があることから、近畿地方において土器の色調に一定の意味がありそうである。

そこで、色調に関する地域差の実態を調べるために、次のような手順で瓜生堂遺跡の出土土器における色調について検討を加えたい。まず、瓜生堂遺跡とやや距離の離れた近畿地方の２遺跡とを比較し、遺跡間の色調差の傾向を把握する。次に、瓜生堂遺跡出土土器において器種別に検討をおこない、器種と色調との相関性を観察したい。今回比較する資料はいずれも中期後葉の土器で、瓜生堂遺跡（河内）は本書報告の99-10区集落域出土資料（図144～161）、および、兵庫県玉津田中遺跡（播磨）、京都府池上遺跡12次資料（丹波）の３遺跡である。色は、一定の条件下で計測し、数値化して遺跡間のデータを比較できるようにするのが望ましいと考えられる。そこで、X-rite社のSP60という計測器（標準光源D65に設定）を使用して色を計測し、 $L^*a^*b^*$ 表色で数値化した。色は明度、色相、彩度の３要

表30 瓜生堂遺跡出土土器の色調データー1

報告番号	L	a	b	器種	部位	備考	報告番号	L	a	b	器種	部位	備考
4063	69.9	7.5	18.9	細頸壺	口縁部外面		4121	66.0	3.2	12.2	鉢	内面	
4064	46.8	3.4	13.6	細頸壺	口縁部内面	生駒	4122	45.2	4.1	8.9	高杯	杯部内面	
4065	59.5	4.9	15.5	壺体部	体部外面		4123	40.5	3.4	10.1	脚部	外面	生駒
4066	60.5	4.9	15.2	広口壺	口縁部内面		4124	54.8	21.1	23.7	甕	体部内面	
4067	72.9	6.9	19.1	広口壺	口縁部内面		4128	48.6	3.2	9.6	甕	体部外面	
4068	52.2	8.5	18.2	鉢	体部内面		4129	44.7	7.7	13.2	甕	体部外面	
4069	40.3	3.6	8.5	脚部	外面		4130	74.3	1.1	8.9	甕	体部外面	
4070	46.3	7.1	14.3	甕	体部外面		4131	49.3	5.9	10.8	甕	体部外面	
4071	44.2	5.0	13.0	甕(大型)	口縁部内面	生駒	4133	41.2	3.3	9.3	底部	底外面	生駒
4072	40.4	3.8	10.2	壺体部	体部外面	生駒	4134	32.2	1.3	3.8	細頸壺	外面	黒色化
4073	47.8	3.9	11.3	高杯	杯部外面		4135	50.5	7.1	15.6	広口壺	外面	生駒
4074	70.1	1.8	11.5	脚部	外面		4136	49.9	4.0	12.9	広口太頸壺	口縁部内面	
4076	55.2	4.1	13.4	甕	体部内面		4137	41.5	3.0	9.3	広口壺	口縁部内面	生駒
4077	52.2	4.8	14.1	甕	体部内面		4138	58.4	0.8	9.4	受口壺	口縁部外面	
4078	45.7	3.4	9.2	鉢	体部外面		4139	59.9	4.8	14.2	受口壺	頸部外面	
4079	52.2	3.6	11.0	蓋	頂部		4141	47.4	5.7	14.2	広口壺	外面	
4080	50.0	4.5	14.1	細頸壺	口縁部外面	生駒	4142	46.6	4.0	12.6	壺体部	体部外面	生駒
4081	49.5	4.5	11.9	鉢	外面		4143	34.2	4.8	7.8	壺体部	体部外面	生駒
4082	55.7	7.5	15.7	甕	体部内面		4144	44.6	1.6	8.1	鉢	体部外面	
4083	46.2	4.5	13.5	甕	体部内面		4145	44.1	3.6	9.6	蓋	外面	
4084	32.3	0.1	1.0	有段口縁壺	口縁端面	生駒	4146	32.2	0.3	1.0	鉢	体部外面	黒色化
4085	56.3	3.4	12.2	直口壺	口縁部外面		4147	63.9	10.9	15.2	高杯	口縁部外面	
4086	71.3	11.7	21.5	壺体部	底外面		4148	42.3	3.5	10.9	脚部	外面	生駒
4087	55.4	5.8	15.1	甕	体部内面		4149	54.7	8.4	13.0	脚部	外面	
4088	26.8	0.4	1.3	直口壺	体部外面	生駒、黒色化	4150	37.3	2.5	7.5	脚部	外面	
4089	47.9	3.4	11.9	受口壺	頸部外面		4151	53.7	4.5	10.8	脚部	外面	
4090	42.8	3.8	9.0	有段口縁壺	頸部外面	生駒	4156	39.3	2.9	7.6	甕	体部内面	
4092	52.2	2.7	12.1	鉢	体部外面	生駒	4158	67.7	3.0	12.7	甕	体部外面	
4093	59.6	5.3	13.5	鉢	体部外面		4159	60.1	1.1	8.6	甕(大型)	体部外面	
4094	59.3	2.8	11.9	高杯	杯部外面		4161	62.2	3.4	13.4	壺体部	内面	
4097	48.1	4.2	9.2	広口壺	頸部外面	生駒	4162	47.1	4.5	11.1	底部	底内面	生駒
4098	66.5	3.5	16.3	広口壺	体部外面		4163	58.5	3.6	11.5	鉢	体部外面	
4099	62.8	4.1	14.5	広口壺	体部外面		4164	57.3	6.1	14.0	高杯	杯部外面	
4100	53.2	6.1	13.9	受口壺	口縁部外面		4165	68.0	1.5	12.3	高杯	杯部外面	
4101	49.4	3.9	13.2	小壺	体部外面	生駒	4167	52.4	4.9	11.9	高杯	口縁内面	生駒
4102	48.9	4.0	12.1	鉢	体部外面	生駒	4168	43.6	4.1	11.3	脚部	内面	
4103	48.6	2.4	10.5	鉢	体部外面	生駒	4169	31.2	3.5	7.0	甕	体部内面	生駒
4104	66.7	7.9	18.9	高杯	杯部外面		4171	63.6	3.0	10.5	甕(大型)	口縁部内面	
4105	43.3	4.8	13.2	脚部	体部外面		4173	50.0	5.2	12.7	広口壺	口縁部内面	
4106	45.2	2.0	8.3	蓋	外面	生駒	4174	50.0	4.5	13.0	有段口縁壺	口縁部端面	生駒
4107	48.7	3.5	8.7	蓋	外面		4175	48.0	3.5	11.3	細頸壺	頸部外面	生駒
4108	59.2	3.6	10.6	甕	体部外面		4176	52.6	5.3	14.1	壺体部	頸部外面	生駒
4109	45.7	5.5	14.9	甕	体部外面		4177	47.9	5.0	12.1	鉢	体部外面	生駒
4110	50.0	2.7	11.7	広口壺	口縁部内面	生駒	4179	56.5	3.7	14.2	蓋	外面	
4111	52.6	5.8	12.7	広口壺	頸部外面	生駒	4180	43.4	5.5	13.4	甕	体部外面	生駒
4112	37.5	2.1	5.8	広口壺	口縁部内面		4183	51.5	1.1	8.8	有段口縁壺	口縁部端面	
4113	50.0	12.6	15.1	広口壺	口縁部内面		4184	67.4	3.3	12.5	鉢	体部外面	
4114	44.6	4.5	11.1	直口壺	外面	生駒	4186	51.1	5.5	15.4	甕	体部内面	
4115	55.6	4.5	13.4	蓋	外面		4187	40.4	2.8	8.8	甕	体部内面	生駒
4116	68.1	1.6	11.5	把手	外面		4188	63.7	3.2	13.3	甕	体部外面	
4117	48.8	1.9	10.3	把手	外面		4189	41.7	3.8	10.4	甕	体部内面	
4118	44.1	3.3	9.9	鉢	外面		4190	54.6	3.6	11.3	広口壺	口縁部内面	
4119	43.0	1.9	5.3	鉢	外面		4191	60.0	1.7	10.0	受口壺	頸部外面	
4120	55.2	3.4	11.6	鉢	外面		4192	66.9	10.6	20.6	受口壺	口縁部端面	

表31 瓜生堂遺跡出土土器の色調データー 2

報告番号	L	a	b	器種	部位	備考
4193	59.5	10.5	15.9	広口壺	頸部外面	
4194	47.4	2.6	9.0	広口壺	頸部外面	生駒
4195	64.3	2.8	11.4	直口壺	頸部外面	
4196	65.7	14.7	21.9	受口壺	頸部外面	
4197	52.5	2.9	8.7	蓋	外面	
4198	45.5	4.3	11.8	鉢	体部内面	
4199	42.7	3.9	9.3	鉢	体部外面	
4200	46.2	3.3	11.7	鉢	体部外面	生駒
4201	48.5	4.2	12.7	鉢	体部外面	生駒
4202	54.7	14.4	20.8	脚部	外面	
4203	48.2	5.2	13.7	脚部	外面	生駒
4205	37.9	4.1	10.6	底部	底内面	生駒
4206	55.2	8.8	17.4	甕	体部外面	生駒
4207	57.7	4.6	13.6	広口壺	体部外面	
4208	55.0	4.8	14.3	広口壺	口縁部内面	
4209	66.3	7.8	17.1	広口壺	口縁部内面	
4210	67.0	5.7	17.5	水差し	体部外面	
4211	63.1	3.9	14.7	無頸壺	体部外面	
4212	43.9	3.6	10.6	甕	体部内面	
4213	63.7	2.4	11.2	直口壺	口縁部外面	
4214	49.0	4.9	14.3	水差し	口縁部外面	生駒
4215	67.6	2.6	14.0	壺体部	体部外面	
4216	47.0	2.5	11.5	脚部	杯部内面	生駒
4217	50.5	4.0	13.6	無頸壺	体部外面	生駒
4219	47.3	4.4	10.3	高杯	口縁部内面	
4220	42.9	5.3	11.4	高杯	口縁部内面	生駒
4222	49.9	3.1	11.1	甕	体部外面	生駒
4223	52.6	4.1	12.5	広口壺	口縁部内面	
4224	50.4	4.6	13.6	広口壺	頸部外面	生駒
4225	70.2	4.8	15.9	無頸壺	口縁部端面	
4226	45.3	2.8	9.3	甕	体部外面	
4227	48.7	4.0	10.7	甕	体部外面	
4229	42.2	2.7	8.6	広口壺	口縁部内面	生駒
4230	47.2	1.7	8.1	広口壺	口縁部外面	
4231	22.8	0.6	1.9	広口壺	口縁部外面	生駒、黒色化
4232	21.5	0.3	1.0	広口壺	頸部外面	生駒、黒色化
4233	48.1	3.7	11.6	広口壺	口縁部内面	生駒
4234	47.4	3.1	8.8	水差し	体部外面	生駒
4236	62.1	2.2	11.2	細頸壺	口縁部外面	
4237	60.5	0.6	0.1	直口壺	口縁部外面	
4238	49.6	5.2	13.7	水差し	体部外面	
4239	67.0	3.5	12.5	受口壺	口縁部内面	
4240	60.2	3.8	14.2	受口壺	口縁部端面	
4241	59.9	3.4	15.3	受口壺	口縁部端面	

報告番号	L	a	b	器種	部位	備考
4242	64.8	2.8	14.7	受口壺	頸部外面	
4243	59.9	4.5	13.2	受口壺	頸部外面	
4244	40.7	2.7	8.9	有段口縁壺	頸部外面	生駒
4245	46.9	4.4	12.0	有段口縁壺	頸部外面	生駒
4246	36.6	3.6	8.9	壺体部	体部外面	生駒
4247	58.4	4.0	14.3	鉢	体部内面	
4248	61.1	3.3	12.8	鉢	体部内面	
4249	37.2	2.5	6.8	鉢	体部外面	生駒
4250	49.7	7.1	15.4	鉢	体部内面	生駒
4251	47.3	4.0	12.2	鉢	体部外面	生駒
4252	46.3	5.5	14.3	鉢	体部内面	生駒
4253	40.3	0.9	7.8	鉢	体部内面	
4254	47.3	3.7	9.5	鉢	体部内面	
4255	58.8	2.4	12.3	鉢	体部内面	
4256	58.0	2.5	11.7	鉢	体部内面	
4257	52.6	3.0	11.8	鉢	体部内面	
4258	70.2	3.8	17.1	高杯	杯部外面	
4259	65.4	4.1	13.8	高杯	杯部外面	
4260	51.2	2.8	11.4	高杯	杯部内面	
4261	34.7	2.2	5.4	高杯	杯部内面	
4262	48.8	7.3	12.2	脚部	外面	
4264	47.9	4.8	13.0	脚部	内面	生駒
4265	48.3	2.8	12.6	脚部	外面	生駒
4266	42.7	2.4	10.2	脚部	内面	
4267	54.0	3.0	10.9	脚部	外面	
4268	43.0	8.3	14.2	脚部	内面	生駒
4269	37.4	3.4	9.3	甕	体部内面	
4272	41.8	1.9	9.4	甕	体部内面	生駒
4277	46.0	4.3	11.9	甕	体部内面	
4278	44.1	4.5	11.3	甕	頸部内面	生駒
4279	54.2	2.9	12.0	甕(大型)	口縁部内面	
4281	42.5	1.5	7.8	甕(大型)	体部内面	生駒
4282	46.5	2.1	7.2	甕(大型)	体部外面	生駒
4283	47.6	3.9	9.0	甕	体部外面	
4284	61.2	3.9	14.2	甕	口縁部内面	
4285	51.9	1.3	6.4	甕	体部外面	
4286	62.9	2.1	10.0	甕	体部内面	
4287	49.4	2.8	11.0	甕(大型)	口縁部内面	
4288	72.3	2.4	15.0	甕(大型)	体部外面	
4289	69.9	1.8	10.6	広口壺	頸部外面	
4291	52.6	16.5	20.4	広口壺	頸部内面	
4292	65.7	4.6	14.5	無頸壺	口縁部外面	
4293	71.2	4.3	13.0	脚部	外面	
4294	43.7	3.2	9.7	鉢	体部外面	生駒

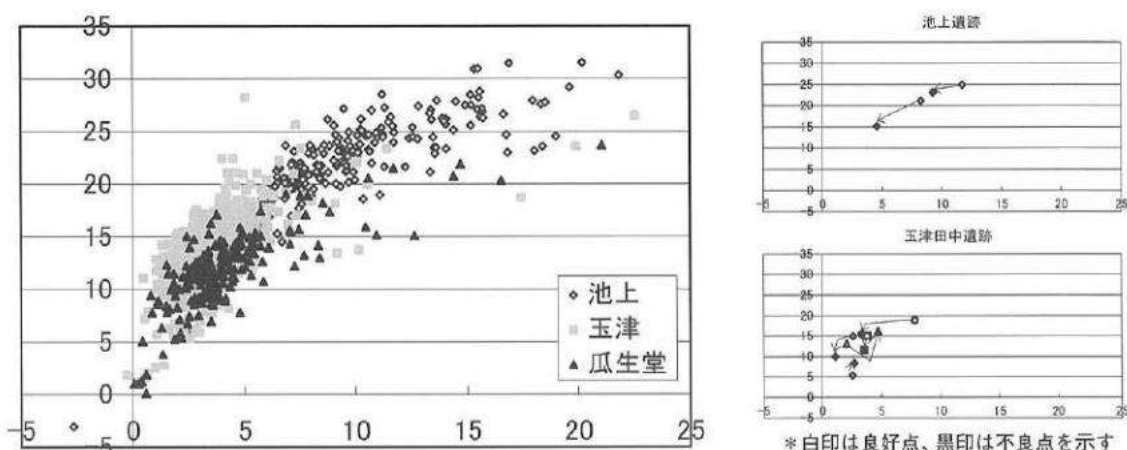


図430 遺跡間の色度比較（左）と保存良好点・不良点の色度（右）

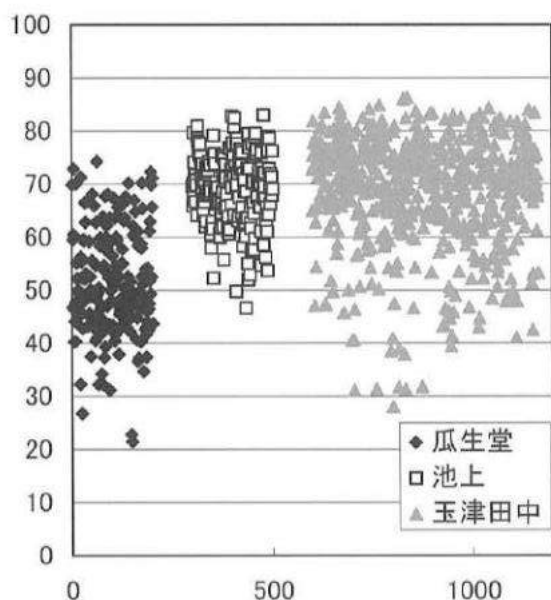


図431 遺跡間の明度比較

素で表されるが、この表色の場合、明度はLで表され、色相と彩度を合わせた色度がaとbで表される。明度Lは数値が大きくなるほど明るく（白っぽい）、小さくなるほど暗い（黒っぽい）ことを示す。色度は、aがプラス方向に大きいほど赤に近く、aの値がマイナスになるほど緑が強いことを表し、bがプラスに大きいほど黄色く、bの値がマイナスになるほど青に近い色になることを示している。この色度の絶対値が大きいほど鮮やかで、小さいほどくすんでいる（色合いが弱い）ことになる。瓜生堂遺跡の個々の計測データは表30・31に掲載した。ただし、煤の付着部分は計測対象としなかったため、残存部全体に煤の付着する個体では計測データは提示していない。

3. 遺跡間の色度比較

図430-左をみると、池上遺跡の土器の色度は赤み、黄みともに強く、全体的に彩度の強い色調をもっていることがわかる。これに対し、玉津田中遺跡および瓜生堂遺跡では、赤みと黄みが弱く全体的に彩度の弱い色調を呈していることがわかる。彩度が弱いということは白や黒のモノトーンに近い色ということになる。このように色度において、2遺跡と池上遺跡の間には明瞭な差異が認められる。ここで注意しなければならないのは、土器の表面の残存状態である。玉津田中遺跡と瓜生堂遺跡出土の土器は残存状態の良好な資料が多いのに対し、池上遺跡は表面が磨耗している資料が多い。そこで、同一個体の同じ部位で残存良好な点と不良な点を計測したのが図430-右である。この図から、残存良好な部分の方が不良部分よりもグラフ上で0からの距離が遠い場合が多く、色みが強く彩度の強い傾向のあることが読みとれる。したがって、池上遺跡出土の土器の色調を残存良好な状態に復原するならば、現段階の計測値よりも彩度がさらに大きくなる可能性が高い。つまり、残存良好な状態であったとしても池上遺

跡と他の2遺跡との色度差は、広がることはあっても小さくなる可能性は低いと考えられ、やはり池上遺跡と、玉津田中遺跡および瓜生堂遺跡との色度には差が認められる。

4. 遺跡間の明度比較

このように、玉津田中遺跡と瓜生堂遺跡の土器の色度を比較すると、それらの値は近似しているようにみえるが、詳しく検討すると、玉津田中遺跡のドットの下半分に瓜生堂遺跡のドットの集中することが見てとれる(図430)。そこで、この差をより詳しくみるために、3遺跡の土器の明るさを比べてみた(図431)。すると、池上遺跡と玉津田中遺跡では、60～80の間にドットが集中し「明るい」個体が多いのに対し、瓜生堂遺跡では、40～70程度の広い範囲にドットが分布し「明るい」から「暗い」個体まであることがわかった。したがって、玉津田中遺跡と瓜生堂遺跡の土器は色度において近い値を示すが、色の明るさにおいて差があり、瓜生堂遺跡の土器なかには玉津田中遺跡と異なる明度の「暗い」ものがあると理解された。

5. 瓜生堂遺跡出土土器の明度と色度

以上、瓜生堂遺跡の土器は他遺跡に比べ、色合いが弱く明るさに幅のある土器群であることがわかった。ところで、瓜生堂遺跡出土土器のなかには生駒山西麓産胎土の土器が含まれており、それらが明度の低い「暗い」個体として示されているのではないかと推測された。そこで、瓜生堂遺跡の生駒山西麓産胎土とそれ以外の胎土の土器を区別して、その明度を示したのが図432である。生駒山西麓産胎土の土器の明度は40～50の間に分布が集中し、その他の土器は70程度の高さまでドットの分布が広がっている。このように生駒山西麓産胎土の土器の明度はそれ以外の土器に比べ「暗い」傾向が読みとれる。と同時に、非生駒山西麓産胎土のなかにも50以下の「暗い」明度の個体のあることが確認された。そこで、この非生駒山西麓産胎土の土器を器種別に並べてみると、広口壺、鉢、高杯、脚、甕、蓋において50以下の

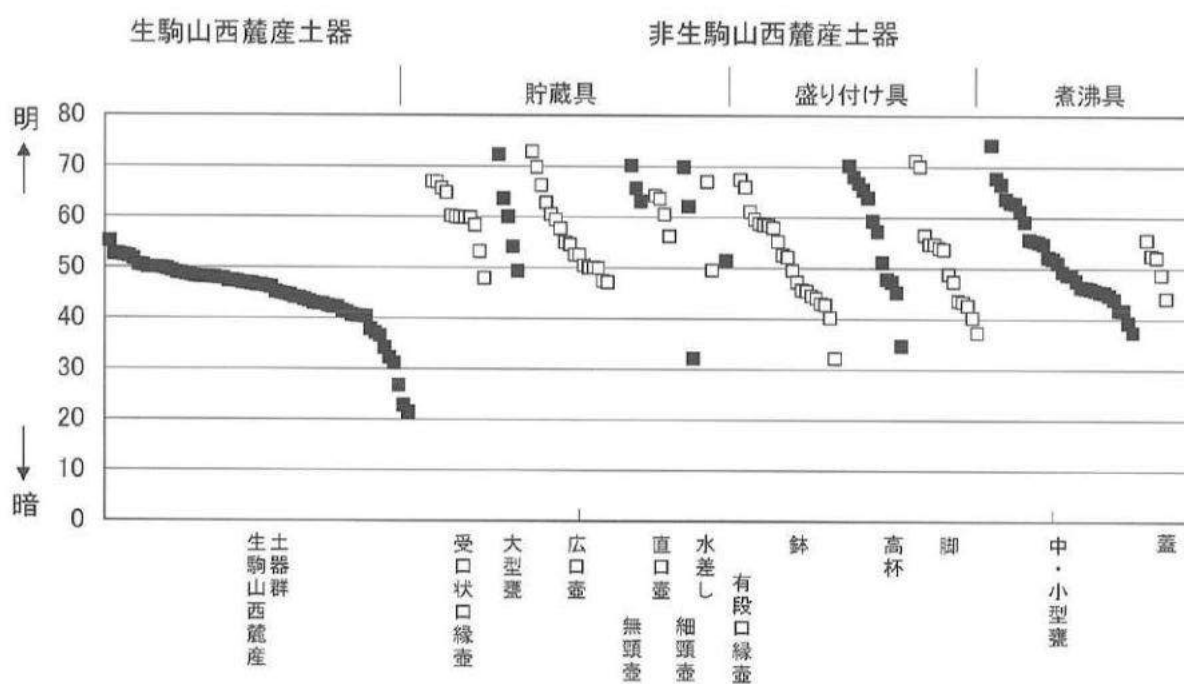


図432 瓜生堂遺跡出土土器の器種別明度

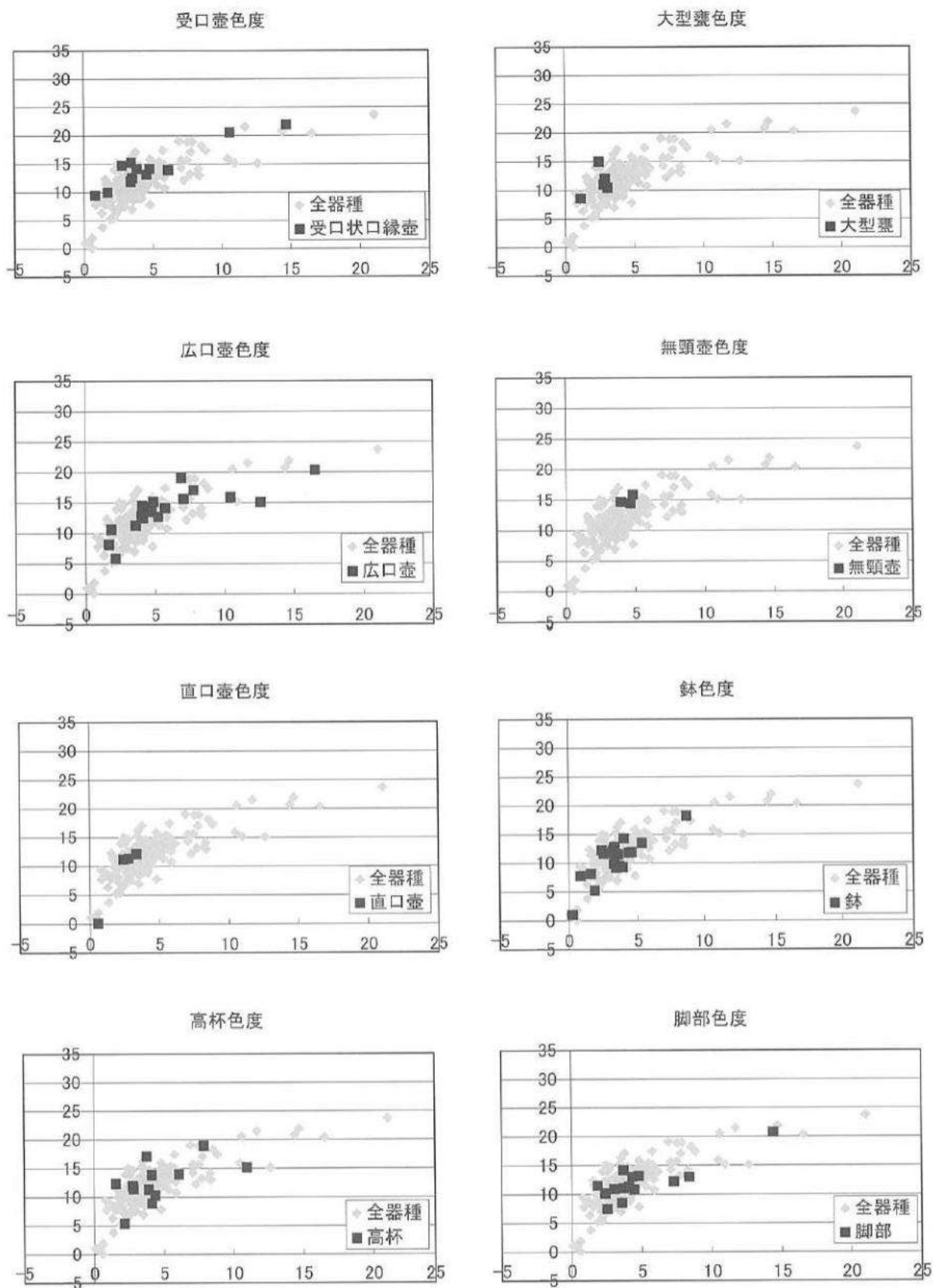


図433 瓜生堂遺跡出土土器の器種別色度－1（生駒山西麓産胎土土器）

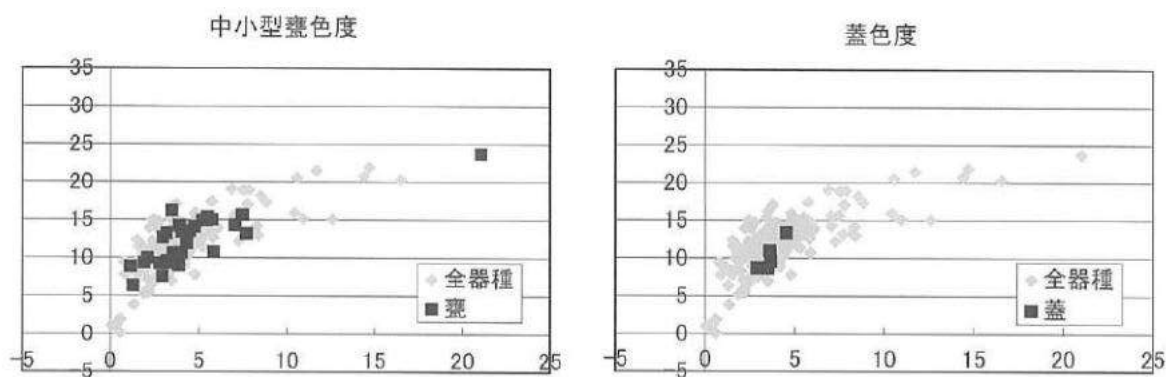


図434 瓜生堂遺跡出土土器の器種別色度－2（非生駒山西麓産胎土土器）

ドットが比較的多く認められた。特に中小型甕、鉢に多く、火をかける頻度の高い器種に明度の低い個体の多いことが示されている。反対に明度の高い「明るい」器種は、受口状口縁壺、大型甕、無頸壺、直口壺、細頸壺、水差しであり、貯蔵具に集中している点が注目される。特に受口状口縁壺は、この遺跡のなかでは明度の高い60以上の部分に集中的に認められた。

次に、非生駒山西麓産胎土の土器の色度について、器種別に検討してみた（図433）。無頸壺や直口壺は点数が少ないので傾向を読みとることができないが、一定量点数のある器種をみると、ばらつきの大きな器種と小さな器種のあることが看取された。例えば、中小型甕や鉢などは比較的ばらつきが大きいのにに対し、極端に赤みの強い個体をのぞくと受口状口縁壺、大型甕には一定程度のドットの集中が認められそうである。そこで、受口状口縁壺を例にとって形態、製作技法と色調との関係を検討してみよう。

瓜生堂遺跡と玉津田中遺跡の、それぞれの出土土器全体における受口状口縁壺と大型甕の色度の位置を比較したのが図435である。瓜生堂遺跡において、この器種には色度の集中が認められることは前述したが、重要なのは、図435に認められるこの値が玉津田中遺跡のそれと近い値を示している点である。では、異なる遺跡間における同一器種の色調の類似は何を示しているのだろうか。

そこで、受口状口縁壺における形態や装飾、製作技法からみた遺跡間の差異を調べるため、この3遺跡の受口状口縁壺の実測図を示したのが図436である。玉津田中遺跡では、頸部が短い形態を呈し、頸体部間の屈曲部に粘土紐を巻きつける。口縁部に格子文や刻みを施す例もあるが、新しくなるほど無文化していく。これに対し瓜生堂遺跡の受口状口縁壺は、玉津田中遺跡のものよりも頸部が細く長い傾向が

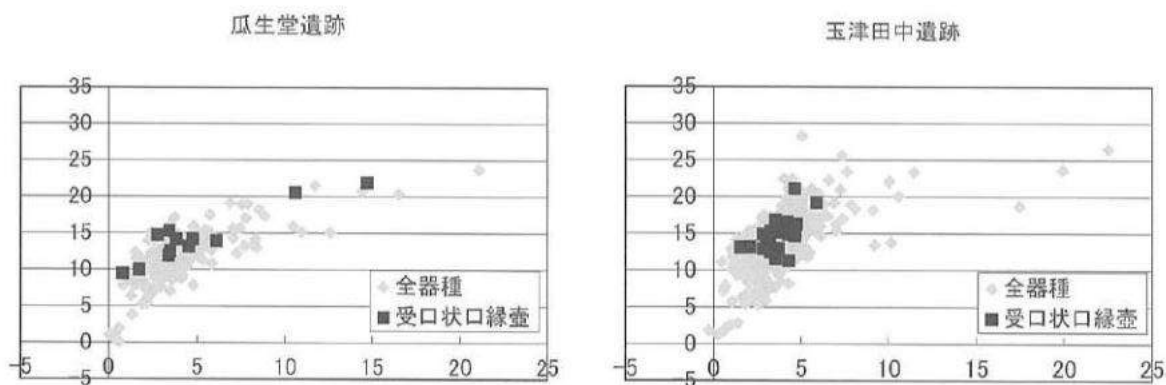


図435 受口状口縁壺の色度比較

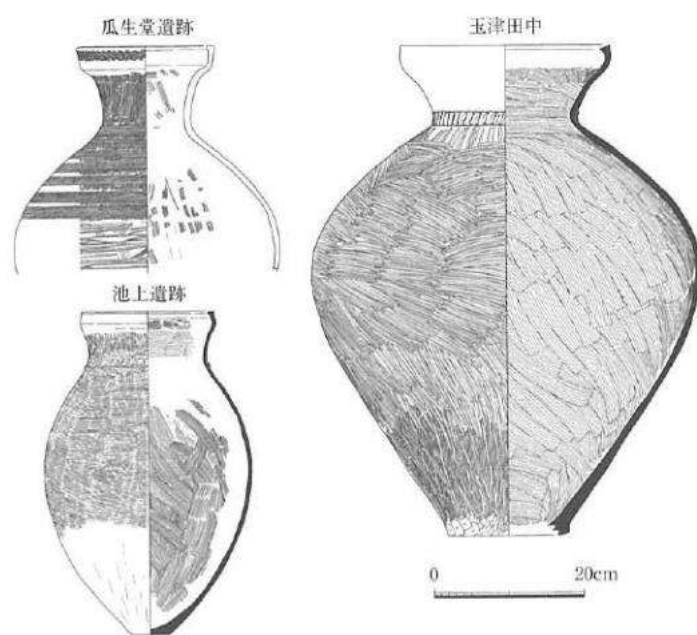


図436 3遺跡の受口状口縁壺

あり、なかには頸部に粘土紐を巻かないものもある。装飾においても、凹線文以外にも口縁部に波状文を施し、体部に簾状文や直線文を施すなど、櫛描き文で装飾する傾向が強い。一方、池上遺跡では、頸部が短く粘土紐を巻きつけるのは玉津田中遺跡と共通するものの、頸部の縮まり方がやや弱く、体部外面にタタキ痕跡が明瞭である。このように、形態、調整、装飾において3遺跡それぞれに特徴のあることが理解される。

このことから、瓜生堂遺跡の受口状口縁壺は、独自に製作され、かつ玉津田中遺跡の受口状口縁壺と類似した色調を呈していたことが確認された。

6. 瓜生堂遺跡出土土器の色調

では、受口状口縁壺の「白い」色調は、意図して作られたものなのであろうか。

そこで、もう一度瓜生堂遺跡に目を向けてみると、色度aが10以上の赤い色調を呈した土器、そして明度30以下という極端に暗い胎土の土器があることに気づく。まず色度aが10以上の土器を肉眼で観察すると、「くさりれき」ともいわれる赤色粒＝褐鉄鉱²⁾が多く含まれるものがある(4113・4192・4196:本書報告No.、以下同じ)。胎土は鉄分を含むと赤い色に発色するが、この含有鉱物からも鉄分の多い胎土を使用した可能性が高く、意図的にこれらの土器を赤くしようとして調節した、あるいはその胎土を使用すると赤い色調になると知って使用したと推定することができる。また、これらの土器が搬入品である可能性も考慮する必要がある。

一方、明度の極端に低い「暗い」土器が3点(4088・4231・4232)ある。これらは広口壺と直口壺のいずれも中型の貯蔵具で、生駒山西麓産胎土の土器である。これらの土器を観察すると、器表面だけがほとんど黒色に近い色を呈している。これは、黒の濃淡がほとんどなく黒色が全面におよぶことから、煮沸のため火にかけて付着した煤の痕跡ではないと判断される。また、同一の遺構から出土した他の土器に同様の痕跡が認められないことから、土器の使用や保存段階で黒色になったのではないと理解される。他方で、近畿地方の弥生前期土器には、焼成した後に炭素を吸着させる方法(小林ほか2000)で、壺などの外面黒色化がしばしば認められる。量は減少するが中期前葉まで継続していることから、中期後葉にこの技法が使われていたとしても不思議ではない。さらに、これらの黒色化された土器が生駒山西麓産胎土の土器であることは注意すべきであろう。北部九州で丹塗りを施す土器の胎土は赤色であり、さらに地域や時期を異にすれば丹塗りの省略された赤色胎土の土器が製作されていることを鑑みるならば、生駒山西麓産胎土が多く使用されることの背景には、暗褐色の色調が重要な採用要因の一つである

と考えられるのではないだろうか。そして、その色調の求めるところは「黒い」色調ではなかったかと推測されるのである。つまり、焼成後に炭素を吸着させるという一工程を省略するために、暗褐色の色調に焼き上がる胎土を選択したと理解することができる。

このように、母体となっている褐色胎土の土器群に混じって、生駒山西麓産胎土を「黒」とすると、受口状口縁壺にみられるような「白」さらに「赤」の色調の土器があり、瓜生堂遺跡では色どり鮮やかな調理具、貯蔵具、盛り付け具を組み合わせて使用していた様子を復原することができるのではないだろうか。

7. 小結

以上、瓜生堂遺跡出土土器を中心に近畿の3遺跡の土器の色調について検討を加え、肉眼による資料観察と計測器による色調計測によって、器種によりまた遺跡により土器に複数の色調のあることを示した。これは、生産と消費の問題としても検討する必要があると同時に、土器装飾としての色調認識の有無としてとらえなおす必要があるのではないだろうか。今回析出した「白」「黒」「赤」の色調が図らずも、いかなる集団によっても明確に差異が認識され記憶されやすい、もっとも普遍的な色彩名称とされる3色（松本1996）と一致することは興味深い事実である。

8. おわりに

弥生土器の色調のちがいが当時の社会において一定の意味があり、そして、その色調の差異は胎土調整の段階から意図されていたものではないか、という課題に対し、今回報告の瓜生堂遺跡出土品と他地域土器の色調を比較検討することによって一定の方向性を述べた。再言はしないが、先記の可能性が全くの荒唐無稽ではなく、いくばくかの有効性のある成果を提示できたと考える。近畿地方の弥生土器のなかでは今までほとんど意識されたことのない分野だけに、そして試行錯誤の過程でもあり、資料操作や評価、記述等が一部やや情緒的な展開になっている点をご寛恕をお願いしたい。が、本稿での検討を問題提起の一つとして、弥生土器のいろいろな色合いに意識的な観察が向けられることがあればと念じたい。

〔註〕

- 1) 雁屋遺跡の“赤い器台”2個体は、池上曾根遺跡の破片例や他遺跡例のように全体が赤褐色を呈するものではなく、部分的には淡褐色系色調を示す部分がある。しかし、本例は、全体的なイメージが赤褐色系をなすので“赤い器台”に含めてよいと考えられる。なお、調査・報告者の野島稔氏は、報告書の記載にはないが、この2個体は在地産土器の可能性を想定されているようである。
- 2) 鐘ヶ江賢二氏のご教示による。

〔引用・参考文献〕

- 秋山浩三 1998 『史跡池上曾根96』 (財)大阪府文化財調査研究センター・和泉市教育委員会 (編)
2004 『史跡池上曾根99』 (財)大阪府文化財センター (編)
(財)大阪府文化財調査研究センターほか 1996 『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』
(財)大阪府文化財調査研究センター 2002 『大河内展－弥生社会の発展と古墳の出現－』
大庭重信 2002 「まつりの復原－雁屋遺跡方形周溝墓－」『大河内展－弥生社会の発展と古墳の出現－』 (財)大阪府文化財調査研究センター

鐘ヶ江賢二 1999 「弥生土器の色調変化についての基礎的研究－北部九州の中後期を題材として－」『人類史研究』11 人類史研究会

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003 「池上遺跡第12次」『京都府遺跡調査概報』108

小林正史・北野博司・久世健二・小島俊彰 2000 「北部九州における縄文・弥生土器の野焼方法の変化」『青丘学術論集』17 韓国文化研究振興財団

四條畷市教育委員会 1994 『雁屋遺跡発掘調査概要』

寺沢 薫・森岡秀人 1989 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』 木耳社

中園 聡 1998 「丹塗精製器種群盛行の背景とその性格－東アジアの中の須玖Ⅱ式土器－」『人類史研究』10 人類史研究会

長友朋子 2003 a 「土器装飾からみた九州北部の地域間関係－弥生時代中期の丹塗土器を素材として－」『立命館大学考古学論集Ⅲ－2』 立命館大学考古学論集刊行会

2003 b 「土器地域色とその社会的背景－弥生時代中期の近畿から瀬戸内を中心に－」『第8回例会発表要旨集 越境する土器－土器にみる空間分析－』 中部弥生時代研究会

(財)東大阪市文化財協会 1989 『(財)東大阪市文化財協会概報集 1988年度』

兵庫県教育委員会 1996 「玉津田中遺跡－第5分冊－」(兵庫県文化財調査報告第135－5)

松本直子 1996 「認知考古学的視点からみた土器様式の空間的差異－縄文時代後晩期黒色磨研土器様式を素材として－」『考古学研究』42－4 考古学研究会

〔図・表・写真出典〕

図428：秋山1998、同2004から作成、図429：四條畷市教育委員会1994、東大阪市文化財協会1989、大阪府文化財調査研究センターほか1996、寺沢・森岡1989から作成、図430～435：新規長友作成、図436：大阪府文化財調査研究センターほか1996、兵庫県教育委員会1996、京都府埋蔵文化財調査研究センター2003から作成、表30・31：新規長友作成、写真11：大阪府文化財調査研究センター2002および秋山新規撮影分から作成、(いずれも一部改変を含む)

〔謝辞・付記〕

鐘ヶ江賢二氏には計測器をお借りしただけでなく様々なご教示をいただき、また、玉津田中遺跡および池上遺跡の土器計測をはじめ各地の資料調査、写真原版借用等にあたり、伊賀高弘、大庭重信、加古千恵子、川村紀子、下村晴文、積山洋、立花正治、田中清美、趙哲済、中川和哉、中村弘、野島稔、森岡秀人、(財)大阪市文化財協会、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、東大阪市教育委員会、兵庫県教育委員会ほかの各氏・機関からご援助をたまわった。また、本稿の一部は、瓜生堂遺跡発掘期間中の2001年1月23日に同現場事務所で開催した、第6回土器移動検討会(内部検討会)での発表内容(秋山「西摂津産器台(赤い大形器台)をめぐる」)であり、さらに、本稿で得られた成果を盛り込んだかたちで2003年11月16日に第8回中部弥生時代研究会で長友が発表をおこなう機会があった(長友2003 b)。両会に参加の方々から多くのご教示をいただいた。あわせて末筆ながら記して深謝申しあげたい。

なお、本稿の執筆は、1・8を秋山、他を長友が担当し、全体調整と除加筆等は秋山がおこなった。